The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「サテ」の直前文を跳び越す用法について
Author(s)	百瀬, みのり
Citation	語文. 2016, 105, p. 59-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70973
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「サテ」の直前文を跳び越す用法について

百瀬みのり

一　はじめに

「サテ」は、古代語にも現代語にもその使用が見られる語であり、指示副詞「サ」に接続助詞「テ」が付いた構成を持つ。これまで「サテ」は、「サテ」と同じく古代からその使用が見られる「カクテ」と比する形で、糸井通浩（一九八七）、西田隆政（二〇〇一）、岡﨑友子（二〇一一）らによって論じられてきた。[1] 中でも岡﨑は、この岡﨑（二〇一一）において、「サテ」が指示詞から接続語に変化した過程を、タイプAからタイプEの五段階に分類して論じている。この五つのタイプ分類は、「サテ」の「サ」が有する指示機能の有無によるものであり、岡﨑は「サ」に指示機能があるタイプをA・B、指示機能がないタイプをC・D・Eとしているが、中古の和文資料には、この五つのタイプのどこにも分類できない「サテ」が認められる。

（1）聞こえわづらひて、あこぎ返事書く。「御文は、御覧じつれど、まめやかに苦しげなる御けしきにてなむ、御返事も。さて、いと長げには、などか。いつのほどにか短さも見えたまはむ。また、頼もしげなくとも、うしろやすくのたまはむ」と書きてやりつ。帯刀、見せたてまつり

〃　　〃恥づかしと思ひたりつるに、気ののぼりたらむ」と、ほほゑみてのたまふ。さて、あこぎ、ただ一人して、言ひ合すべき人もなければ、心一つをちぢになして

（『落窪物語』　巻之一　四九頁）

（1）の例の「さて～」は、その直前の「帯刀～ほほゑみてのたまふ。」とは場面が転換しており、関わる人物も異なっている。つまり、この「サテ」は直前文を承けない「サテ」であると言える。それだけなら、従来いわゆる「転換」の用法として整理されてきた「サテ」と言えようが、これは直前文を跳び越し、なおか

つ跳び越した直前文より前部の「聞こえわづらひて、～と書きてやりつ。」とは場面が続いており、関わる人物も同じであって、事態の時間的・空間的な連続がある「サテ」でもあるのである。つまり、これは、「直前文の場面から転換」し、かつ「直前文より前部の場面と連続」している文脈中に置かれている「サテ」なのである。

本論ではこのような用法をもつ「サテ」を『跳び越しのサテ』と名付け、このはたらきに注目する。具体的には、

①中古の和文資料における「サテ」の用例中で、『跳び越しのサテ』はどのように位置付けられるのか

②なぜ「サテ」にこのような用法があるのか

について述べたい。

二　『跳び越しのサテ』について

まず、論者がどういう用例を『跳び越しのサテ』の例と見ているかを確認しておく。「サテ」について考えるのに、本論では先述の岡﨑（二〇一一）による「サテ」の分類の枠組みを利用したい。以下に、その分類の枠組みを岡﨑（二〇一一）より抜粋して示す。

（以下、Xは先行する言語的文脈、または現場・記憶内、Yは言語的文脈）

タイプA：（論者注：「サテ」が）指示詞として機能している。X内の事態を指示対象とし、Y内の語（句）・節、またはY（文）に係り、それらの表す事態を修飾・限定する。

タイプB：指示詞として機能している。X内の事態を指示対象とし、X内の事態（条件・原因等）によりYの表す事態が起こる、またはX内の事態に引き続きYの表す事態（XとYは関わる人物が共通する、また時間的・空間的に連続する等）が起こることを示す。

タイプC：指示詞としての機能は形式化している。X内の事態にYの表す事態を添加する（XとYは関わる人物が異なる、時間的・空間的に隔たりがある等）、または話題が転換することを示す。

タイプD：タイプCとほぼ同じであるが、Xが言語的文脈でないもの（Xが現場の状況等）。

タイプE：指示詞としての機能は形式化している。XとYの表す事態を関係づけるのではなく（Xがない場合もある）、感情を表す。

（以上、岡﨑（二〇一一）七二～七三頁より抜粋。）

右の岡﨑の分類を踏まえ、本論で用例採集資料としている中古の和文資料から、各々のタイプに分類される用例を挙げ、（　）内に適宜現代語訳を示す。

タイプA

（2）くらつまろ申すやう、「燕子うまむとする時は、尾を捧げて、七度めぐりてなむうみ落とすめる。さて七度めぐらむをり、引き

あげて、そのをり、子安貝は取らせたまへ」と申す。（そんなふうに七度廻るときに）（『竹取物語』、五二頁）

タイプB

（3）故右京の大夫の、人のむすめをしのびてえたりけるを、親聞きつけて、ののしりてあはせざりければ、わびてかへりにけり。さて、朝によみてやりける。（そうして、翌朝に歌を詠んでやる。）（『大和物語』、二九四頁）

タイプC

（4）ある人の、この波立つを見てよめる歌、　霜だにも置かぬかたぞといふなれど波の中には雪ぞ降りける　さて、船に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になりにけり。（波の中にはなんと雪が降っていることよ。さて、船に乗った日から今日までに）（『土佐日記』、三一頁）

タイプD

（5）さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。（この男はある年の秋、西の京極、九条の辺りに行った。）（章段冒頭：『平中物語』、五二二頁）

タイプE

（6）「田舎びたる人どもに、忍びやつれたる歩きも見えじとて口かためつれど、いかがあらむ、下衆どもは隠れあらじかし。さて、いかがすべき。（〈薫大将は、浮舟との仲立ちを弁の尼君に頼む。〉大将は、「田舎びた人たちに、忍びやつれた姿を見せまいと口止めをしておいたのですが、どんなものでしょう。下人たちには分かってしまうでしょう。さて、どうしたものか。）（『源氏物語』、宿木、四九五頁）

『跳び越しのサテ』は、「サテ」直前の文との関係を見るとタイプCのようであるが、直前の文よりさらに前の部分との関係を見るとタイプBであるように見える。タイプBとタイプCは、「サテ」に指示詞機能が認められるか否かという点で一線を画する。これらを踏まえた上で、もう一度（1）の用例を見てみる。

（1）聞こえわづらひて、あこぎ返事書く。「御文は、御覧じつれど、まめやかに苦しげなる御けしきにてなむ、御返事も。さて、いと長げには、などか。いつのほどにか短さも見えたまはむ。また、頼もしげなくとも、うしろやすくのたまはむ」と書きてやりつ。帯刀、見せたてまつりたれば、「いみじくされて物よく言ふべき者かな。むげに恥づかしと思ひたりつるに、気ののぼりたらむ」と、ほほゑみてのたまふ。さて、あこぎ、ただ一人して、言ひ合すべき人もなければ、心一つをちぢになして（『落窪物語』巻之一、四九頁）

右の（1）の例の実線部「さて」以下の引用文は、その直前の網掛け部「帯刀～ほほゑみてのたまふ。」とは場面が転換しており、関わる人物も異なる。つまり、この「サテ」は場面や人物などの連続性がなく、直前文を承けない「サテ」である。ここに注

目するとこの「サテ」は、前出の分類のタイプCに相当すると考えられる。同時に、「帯刀〜ほほゑみてのたまふ。」より前部の点線部「聞こえわづらひて、〜と書きてやりつ。」とは場面や関わる人物が続いており、点線部と「さて」以下の引用文で表されている事態の時間的・空間的な連続が見て取れる。こちらに注目すると、この「サテ」は、網掛け部を跳び越して、それより前の部分である、点線部の「〜と書きてやりつ。」と連続性があり、タイプBに相当するとも考えられる。つまり、この「サテ」は、「サテ」の指示詞機能の残存の有無に注目して見た際に、矛盾した二つのタイプに属している例であるように見えるのである。

次の例も同様である。

(7)「(略)はかなきあだ事をも、まことの大事をも言ひあはせたるにかひなからず、竜田姫と言はむにもつきなからず、織女の手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむはべりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。中将、「その織女の裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞあえまし。げに、その竜田姫の錦には、また、しくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、をりふしの色あひつきなくはかばかしからぬは、露のはえなく消えぬるわざなり。さあるにより、かたき世とは定めかねたるぞや」と言ひはやしたまふ。「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人も立ちまさり、心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み、走り書き、

(『源氏物語』、帚木、七七頁)

右(7)の例も先述の(1)の例と同じである。実線部「さて」以下の引用文は、その直前文の網掛け部「中将〜言ひはやしたまふ。」を跳び越して、点線部「はかなきあだ事をも、〜思ひ出でたり。」と連続しているのである。この「サテ」も、直前文との関係を見るとタイプCに当たるが、それを跳び越してさらに前の部分との関係を見るとタイプBに当たる。この(7)の「サテ」もBとC、二つのタイプに属している『跳び越しのサテ』の例であると考えられる。

三　中古の「サテ」について

この節では、前節で示した『跳び越しのサテ』が中古の資料にどれくらい見られるのかを確認する。

三・一・用例採集資料及び用例の分類方法について

調査対象は下記の中古の物語資料とする。

調査資料:『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『土佐日記』『落窪物語』『堤中納言物語』『源氏物語』

なお、資料における地の文、対話文などの「サテ」の使用場面の違いは、考察対象である『跳び越しのサテ』の全用例数自体の問題(表1参照)などから、今回は特に問題としないこととする。また、分類は前出の岡崎(二〇一一)の五分類を用いる。

（表１）

「サテ」	A	B	C	D	E	その他	計
『竹取物語』	1	1	0	0	0	（ⅱ）1	3
『伊勢物語』	0	10	0	0	0	0	10
『大和物語』	0	29	0	0	0	（ⅰ）8（ⅱ）1	38
『平中物語』	6	35	0	2	0	（ⅰ）1	44
『土佐日記』	0	2	2	0	0	（ⅱ）1	5
『落窪物語』	3	11	3	0	0	（ⅰ）2（ⅱ）4	23
『堤中納言物語』	0	4	0	0	0	（ⅰ）1（ⅱ）1	6
『源氏物語』	43	41	4	1	1	（ⅰ）8（ⅱ）6	104

三．二．調査結果（表１）に資料を対象に調査した結果について（表１）「サテ」の五分類

・数値は例数を表す。

・その他（ⅰ）分類Ａ・Ｂにまたがる例数。（ⅱ）分類Ｂ・Ｃにまたがる例数。

三．三．データの扱い

本論では（表１）中の「その他」（ⅱ）に注目することとする。これは、『跳び越しのサテ』がタイプＢとタイプＣにまたがるタイプであることによる。論末に、この「その他」の（ⅱ）に分類された『跳び越しのサテ』の用例を示す。

四　「サテ」の直前文を承けない用法について

四．一．「サテ」と「カクテ」

一．でも述べたように、先行研究では「サテ」は「カクテ」と比して論じられてきた。これは、「カクテ」も「サテ」も古代語から使用されていたこと、指示副詞「カク」、「サ」に接続助詞「テ」が付くという語構成上の類似などから、対立する語として認識されてきたことなどによる。

では、この『跳び越しのサテ』がもつ跳び越し機能は、『カクテ』も有しているのであろうか。ここではそれを検証することで、「サテ」と「カクテ」の差異について述べ、それを踏まえた上で改めて「サテ」が跳び越し機能をもつ意味を考えてみたい。

（表２）

「カクテ」	A	B	C	D	E	その他	計
『竹取物語』	0	1	0	0	0	（ｉ）1	2
『伊勢物語』	0	1	0	0	0	（ｉ）1	2
『大和物語』	5	13	0	0	0	（ｉ）21　（ii）1	40
『平中物語』	1	2	0	0	0	（ｉ）2	5
『土佐日記』	0	0	0	0	0	（ｉ）7	7
『落窪物語』	16	7	5	1	0	（ｉ）1	30
『堤中納言物語』	3	0	0	0	0	0	3
『源氏物語』	98	18	2	0	0	0	118

まず、「カクテ」の跳び越し機能の有無を確認する。

（表２）「カクテ」の五分類

・数値はその例数の実数を表す。

・その他　（ｉ）分類Ａ・Ｂにまたがる例数。

（ii）分類Ｂ・Ｃにまたがる例数。

（表２）によれば、「その他」の（ii）に分類される例は一例のみ[2]で、「カクテ」には跳び越し機能がほとんどない。ではなぜ「サテ」には認められる跳び越し機能が「カクテ」にはないのであろうか。それについて、次節で考察することとする。

四．二．「カクテ」の総括性

次頁の表は、岡﨑（二〇〇二）からの抜粋である。

この表より、カク系列の指示副詞は照応用法と直示用法、サ系列の指示副詞は照応用法と観念用法がその主用法であることが分かる。指示副詞「カク」と指示副詞「サ」は共に照応用法を有しているが、直示用法については「カク」は有しており、「サ」には僅かしか見られない。

金水（一九九九）は、上代のコ系列の照応用法は、現代語よりも直示用法との間がより近いことを述べている。それを踏まえて、以下に「カクテ」の用例を見ていく。

（8）道にて、くらもちの皇子、血の流るるまで打ぜさせたまふ。

古代語 （中古）	コ系列 （指示代名詞）	カク系列 （指示副詞）	ソ系列 （指示代名詞）	サ系列 （指示副詞）	カ系列 （ア系列） （指示代名詞）
照応用法	●	●	●	●	
直示用法	●	●	※	※	●
観念用法			●	●	●

（●はその用法の例が多く見出され、※は僅かしか見られないことを示す。）
（岡崎（二〇〇二）八頁より抜粋。）

禄得し甲斐もなく、みな取り捨てさせたまひてければ、逃げうせにけり。かくて、この皇子は、「一生の恥、これに過ぐるはあらじ。（『竹取物語』、三六頁）

（9）母北の方見るに、帥はいともものしく、ありさまもよければ、「さ言へども、やむごとなき人のしたまへることは、こよなかりけり」と喜ぶ。かくていといそがし。（『落窪物語』、巻之四、三二七頁）

これらの「カクテ」は照応用法ではあるが直示用法、つまり「カクテ」以前で述べられている物語内容を直接知覚、認識して述べている用法に近いものと考えられる。物語は話題の一つひとつを積み重ねて順に語る形で文脈を形成するので、その文脈の中で直示用法に近い照応用法で「カクテ」がはたらけば、その関係付けは、物語の文脈そのものを文脈の流れのとおりのままに関係付けるものとなり、それは累積的、総括的な接続となる。

（8'）

道にて、くらもちの皇子、血の流るるまで打ぜさせたまふ。

＋

禄得し甲斐もなく、みな取り捨てさせたまひてければ、逃げうせにけり。

かくて

この皇子は、「一生の恥、これに過ぐるはあらじ。

四．三．「サテ」の階層性

一方、「サテ」の構成要素である指示副詞「サ」の照応用法は、前述の指示副詞「カク」の照応用法とは異なり、直示用法との近似性をもつものではない。[3]

まず、『跳び越しのサテ』として用いられている「サテ」の例を示す。

（10）「（略）竜田姫と言はむにもつきなからず、織女の手にも劣

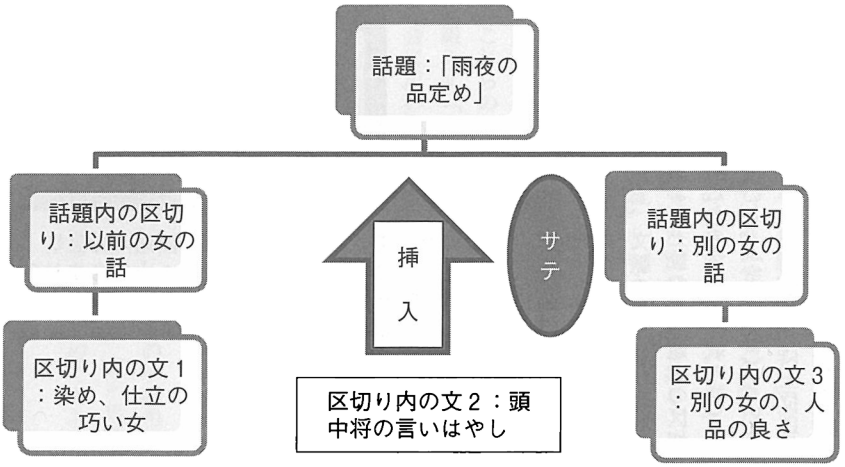
るまじく、その方も具して、うるさくなむはべりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。中将、「その織女の裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞあえまし。～さあるにより、かたき世とは定めかねたるぞや」と言ひはやしたまふ。「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人もたちまさり（左馬頭は）「染めも仕立も巧い、大した女でした。」と言って、かわいそうだったと思いだしている。（略）（左馬頭は）「さて、また同じ頃に通っておりました別の女は）（『源氏物語』、帚木、七七頁）

（11）中納言、「（略）券は何か賜はらむ。またも参らせまほしくなむ。（『落窪物語』、巻之三、二四一頁）～おとどの御返り、「やがて昨日はさぶらはむと思うたまへしかど、方の塞がりてはべりしかばなむ。今よりはいとうれしく、明け暮れもさぶらひぬべしと思ひたまへしを、命のびてなむ。さて、賜はせたる券は賜はるまじきよしは、聞こえはべりしを、なほかうせさせたまふ、御勘当の深きなめりと、かしこまり思ひたまふる。（中納言は、「地券などどうしていただけましょう。さらに別の土地をさし上げたく存じます。」（略）「さて、お届けいただきました地券は、いただきかねる由を申し上げましたのに）（『落窪物語』、巻之三、二五三頁）

（10）（11）は共に、「サテ」以降の文はその直前の網掛け部は承けず、そこを跳び越して点線部の場面と連続している。これは、先述の「カクテ」が「カクテ」以前の文脈部分を総括的にまとめて指示して接続していたのとは異なる型の接続である。

これについて、甲田（一九九五）は、「さて」と「ところで」の違いを、それによって構成される Discourse の構造の違いによって説明している。甲田は「さて」と「ところで」を含む Discourse の構造を考えるために、〈Topic〉〈Segment〉〈Detail〉という階層を用い、説明を行っている。その考え方を応用して、この『跳び越しのサテ』が用いられている構造を（10'）に示す。

（10）を図示してみると（10'）のように『跳び越しのサテ』は階層性を有していると考えられる。文脈は図の最下層の「区切り内の文」として、《染め、仕立の巧い女》《頭中将の言いはやし》《別の女の、人品の良さ》と続く。それが文より上位の「話題内の区切り」を考えてみると、この文脈は《以前の女の話》《別の女の話》と、同一話題（「雨夜の品定め」）内で区切られた別の小話（エピソード）であり、それがさらに上位に位置する「雨夜の品定め」という一つの話題内に収まっており、「サテ」は大きな一つの話題の中での小話の区切り目を示すところで用いられている。（10）（11）は『跳び越しのサテ』の例であるが、（10）の場合、《頭中将の言いはやし》が元からあった話に挿入された形を取るため、「サテ」直前文と「サテ」以降の文に連続性がないように見え、その上、「サテ」が同一話題内での小話の区切りを示す位置に置かれているので、その結果、「サテ」以降の文は、「サ



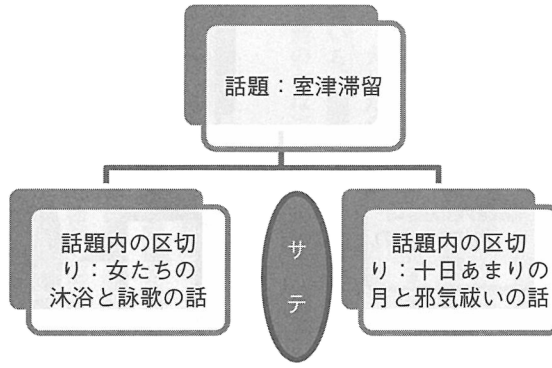
（10'）

テ」直前文を跳び越して、直前文より前部の文と場面や人物などについて連続性があるように見えるのである。

次に、『跳び越しのサテ』以外の、文中で指示詞として機能しているのではない「サテ」についても示す。【タイプA】と【タイプB】は「サテ」に指示詞としての機能があるタイプなので、ここでの目的には合わないため考察対象とはせず、【タイプC】と【タイプD】について考える。

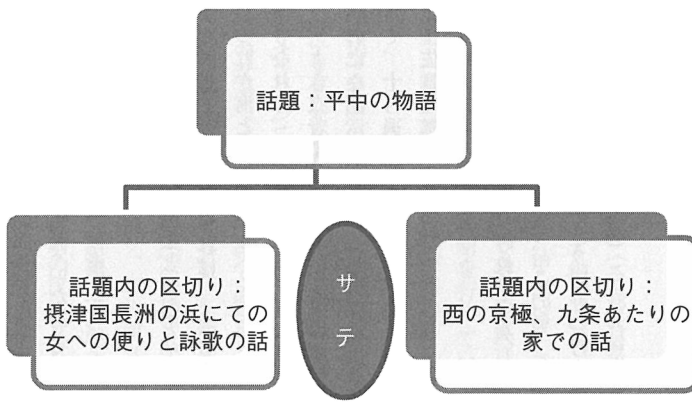
【タイプC】（12）沐浴などせむとて、あたりのよろしきところに下りて行く。海を見やれば、　雲もみな波とぞ見ゆる海女もがないづれか海と問ひて知るべく　となむ歌よめる。さて、十日あまりなれば、月おもしろし。船に乗り始めし日より、船には紅濃く、よき衣着ず。（『雲もみな波のように見える。海女がいるといいのになあ、どちらが海なのか聞いて知るのに』と歌を詠んだ。さて、十日過ぎなので月がとても良い。船に乗り始めた日から）（『土佐日記』、二九頁）

【タイプD】（13）さりければ、久しくも長居で、帰り来にけり。（章段が変わって）さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。（そういうわけで長居もせずに帰って来たのだった。（章段が変わり）この男はある年の秋）（『平中物語』、五二二頁）



(12')

右図によれば（12'）は前出の（10'）と同じ構造であることが示せる。紙幅の都合上、文脈の最下層に位置する「区切り内の文」は省略するが、文より上位の「話題内の区切り」を考えてみると、ここの文脈は《女たちの沐浴と詠歌の話》と《十日あまりの月と邪気祓いの話》という、《室津滞留》という同一話題内で区切られた別の小話であり、それがさらに上位に位置する《室津滞留》という一つの話題内に収まっている構造をもっており、「サテ」は一つの話題の中で、小話の区切り目を示すところで用いられている。



(13')

右図に示した（13'）も前出の（12'）と同じ構造である。ここで

も紙幅の都合上文脈の最下層の「区切り内の文」は省略する。文より上位に位置する「話題内の区切り」を考えてみると、この文脈は、《摂津国長洲の浜にての女への便りと詠歌の話》と《西の京極、九条あたりの家での話》という、「平中の物語」という同一の話題内で区切られた別の小話である。それがさらに上位に位置する「平中の物語」という一つの話題内に収まっている構造をもち、「サテ」は一つの話題の中で、小話の区切り目を示す位置に置かれている。

これらの（12'）、（13'）からも分かるように、『跳び越しのサテ』に限らず「サテ」は大きな一つの話題内で、小話の区切りを示す場合に用いられている。この、同一話題内での区切られた別の小話というのは、同じ話題に属してはいるが、話題の焦点となる箇所（焦点となる人物、事態など）が異なるものであると考えられる。その点において「サテ」は先述の「カクテ」とは異なる。「カクテ」はそれ以前の部分を累積してまとめ、総括的な接続を行う。一方「サテ」は一つの話題内に所属していることを表明し、なおかつ小話の区切り目を示す。そして、この「サテ」のもつ、一つの話題内ではたらき、その中の小話の区切りを表すことで構築していく階層性は、「サテ」の、直示用法との近似性から解放された用法[4]によって保証されたものであると考えられる。

以上から、「カクテ」と「サテ」は、はたらくレベルが異なると考えられる。「サテ」がもつ跳び越し機能が「カクテ」にはないことも、両者のはたらくレベルの違いにより説明できると考えられる。

五　『跳び越しのサテ』の意味について

前節までに、『跳び越しのサテ』について述べてきたが、ここでは『跳び越しのサテ』に区切り目を示す用法があることの意義について注目することとしたい。

五．一．「サテ」の具体的な指示対象をもたない用法について

岡﨑（二〇〇二）によれば、古代語の指示副詞「サ」は、指示代名詞では「ソノ」「ソレ」「ソコ」などのソ系列であり、現代語では指示副詞も「ソウ」「ソンナニ」「ソウシテ」「ソレホド」などソ系である。それを踏まえた上で考えてみることとする。

現代語では、現場にも先行文脈にも、確たる指示対象が存在しない場合にも指示詞のソ系を用いることがある。

（14）A：お出かけですか。B：ええ、ちょっとそこまで。（金水一九九九、八五頁）

（15）A：私のメガネ知らない？B：その辺に置いてるんじゃないの。（金水一九九九、同）

（16）彼はそこらの学者とは比較にならない学識と経験を持っている。（金水一九九九、同）

金水（一九九九）は、これらの例で表されているソ系を、「言語外世界に確定的な値をあらかじめ持たない」ソ系列の指示詞を用いた慣用表現として、『曖昧指示のソ』としている。

岡﨑は岡﨑（二〇〇六）「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について―ソ系（ソ・サ系列）指示詞再考―」において、これらについて、田窪・金水（一九九六）の談話管理理論を用いて説明する。岡﨑によれば、「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現は先の照応用法と同じく、先行文脈から（時には一般知識領域内の活性化された情報を参照し）推論を行い、得られた要素を指示対象とする（指示対象は不定な部分を含むものもある）。そして、これらの指示対象は、談話情報領域内に一時的に格納されている要素である。但し、感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現の先行文脈とは、照応用法のように同一または直前のものとは限らず、また音声化・書記化されていない発話者の心内のみの言語文脈であってもよい。さらに、これらは一般知識領域内の情報だけではなく、エピソード記憶領域内の活性化された情報も参照し、推論を行う場合もある」（岡﨑（二〇〇六）、八二頁より抜粋）との説明がなされている。

『跳び越しのサテ』は、金水や岡﨑の述べる『曖昧指示』と関連したものと考えてよいかと思われる。『跳び越しのサテ』は、直前部を跳び越えた、「サテ」前部と場面の連続はあるものの、その前部に指示対象とするべき具体的な要素、先行部があるというより、「サテ」以降の部分が直前部を跳び越えた、「サテ」前部と同一話題内に所属しているということを示すことがその本義であると考えた方が、その機能をとらえやすい。つまり、直前部を跳び越えた、「サテ」前部との間に見られる場面や人物の連続性は、「サテ」によるものではなく文脈による連続であり、文脈中に特定的な先行部をもたず、具体的に前出部分のどこをも指示しないのが、『跳び越しのサテ』であると考えられるのである。具体的な指示箇所が文脈中には求められないことに着目し、『跳び越しのサテ』は曖昧指示表現との関連を考えてよい面があると思われる。以上を踏まえ、次節ではこの『跳び越しのサテ』が物語の中でどのようにはたらいているのかについて考えてみたい。

五．二．「サテ」の物語の構造化機能

前節で述べたように、『跳び越しのサテ』の「サテ」は、直前部ではない「サテ」前部のどこかを特定的、具体的に指示するのではなく、直前部ではない「サテ」より前部と「サテ」より後部が同一話題内に所属しているということを表す「サテ」である。ここで再び（10′）を見てみる。（10′）によれば、「サテ」が用いられているのは同一話題に属する、【話題内の区切り】の境目である。しかし、境目ではあるが同一話題内であるので、話題そのものは変わっていない。つまり、「サテ」は物語中にいくつか現れる話題の下で、それに則って述べられていく物語の末端の各部をまとめ、【話題内の区切り】となる一つの話題中の［小見出し］に当たるまとまりを示すことで、物語を整理し、それを構造化す

る機能をもつのだと考えられる。物語は構造化されることで、その内容への複数の視点からの言及が可能となり、また同一時系列に生じた複数の場面のエピソードを述べることが可能になるなどと、様々な益を与えられる。

「サテ」によって行われる、論中でいくつか図示したこのような物語の構造化は、五．一．で示したように、これが特定的、具体的な対象を指示していない「サテ」であることにより可能となる。『跳び越しのサテ』は同一話題中の話を区切り、区切ることで話に【話題内の区切り】としての［小見出し］に当たるまとまりをいくつか作る。そのように、同一話題内で、小さく話を区切り、まとめることで、大きな一つの【話題】に属する小さな話の終わりと始まり―【話題内の区切り】としての［小見出し］を示すこと―がその機能の中枢であると考えられる。そしてこれは、「サテ」が特定的、具体的な対象を指示しないからこそ、別の言い方をすれば、「サテ」が実質的な指示詞性を失って、形式化、文法化しているからこそ可能となる「サテ」の用法であると考えられる。『跳び越しのサテ』として用いられている「サテ」の存在は、このような「サテ」の形式化―指示詞ではなく接続詞としてはたらく「サテ」の存在―の証左となりうると考えられる。

六　まとめ

本論では、先行研究では言及されていない、「サテ」の直前文を跳び越す用法、『跳び越しのサテ』について示した。具体的には、

①中古の和文資料における「サテ」の用例中には、先行研究で述べられてきた「サテ」の用法では説明できない、『跳び越しのサテ』の例がある。これは、「サテ」以降の部分が、「サテ」の直前部を承けずにそこを跳び越えた「サテ」前部と同一話題内に所属しているということを示す用法であり、物語の構造化に寄与する。

②「サテ」のこの用法については、「サテ」が具体的、実質的な指示詞性を失い、形式化、文法化していった結果、獲得した一用法である可能性がある。

この二点を述べた。

なお、『跳び越しのサテ』以外の、先行研究では言及されていない「サテ」の用法について述べることは今後の課題としたい。

注

（1）これらの先行研究では「サテ」を『接続語』として扱う。

（2）『大和物語』九六段の章段冒頭「かくて九の君、侍従の君にあはせたてまつりたまひてけり。」の例。前段九五段を跳び越し、九四段と場面や登場人物が同じであり、物語事態の時間的・空間的な連続がある。

（3）岡﨑（二〇〇二）、藤本（二〇〇八）によれば、指示副詞「サ」が直示用法を獲得したのは、中世後期から近世期にかけてと考えられる。

（4）金水（一九九九）はこれを「非直示用法」として述べている。

使用テキスト

すべて新編日本古典文学全集（小学館発行）による。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』片桐洋一　福井貞助　高橋正治　清水好子　校注・訳　一九九四年　新編日本古典文学全集12

『土佐日記』菊地靖彦　木村正中　伊牟田経久　校注・訳　一九九五年　新編日本古典文学全集　13

『落窪物語』『堤中納言物語』三谷栄一　三谷邦明　稲賀敬二　校注・訳　二〇〇〇年　新編日本古典文学全集17

『源氏物語』阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男　校注・訳　一九九四～一九九八年新編日本古典文学全集20～25

参考文献

池上禎造（一九四七）「中古文と接續詞」『國語・國文』第十五巻第二〇号、京都帝国大学国文学会、一―九頁。

糸井通浩（一九八七）「中古文学と接続語―「かくて」「さて」を中心に―」『日本語学』第六巻第九号、明治書院、八四―九四頁。

岡崎友子（二〇〇二）「指示副詞の歴史的変化について―サ系列・ソ系を中心に―」『国語学』第五三巻第三号、（二一〇）、国語学会、一―一七頁。

岡崎友子（二〇〇六）「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について―ソ系（ソ・サ系列）指示詞再考―」『日本語の研究』第二巻第二号、日本語学会、七七―九一頁。

岡崎友子（二〇一一）「指示詞系接続語の歴史的変化―中古の「カクテ・サテ」を中心に―」『日本語文法の歴史と変化』青木博史編　くろしお出版、六七―八七頁。

金水敏・木村英樹・田窪行則（一九八九）『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4　指示詞』くろしお出版

金水敏・田窪行則編（一九九二）『日本語研究資料集1　指示詞』ひつじ書房

金水敏（一九九九）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』六―四、言語処理学会、六七―九一頁。

金水敏（二〇〇〇）「指示詞―「直示」再考―」中村明編『現代日本語必携』『別冊國文学』五三、學燈社、一六〇―一六三頁。

金水敏・岡崎友子・曺美庚（二〇〇二）「指示詞の歴史的・対照言語学的研究―日本語・韓国語・トルコ語―」『シリーズ言語科学4　対照言語学』生越直樹編、東京大学出版会、二一七―二四七頁。

甲田直美（一九九五）「転換を表す接続詞「さて」「ところで」「では」をめぐって」『日本語と日本文学』二一、筑波大学日本語日本文学会編、三一―四二頁。

田窪行則・金水敏（一九九六）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』vol.3,No.3, 日本認知科学会、五九―七四頁。

塚原鉄雄（一九五八）「接続詞」『続日本文法講座1　文法各論編』、明治書院、一五六―一七四頁。

西田隆政（二〇〇一）「源氏物語における指示語「さて」の用法―平安和文での接続詞的用法の展開をめぐって―」『国語語彙史の研究』二十、国語語彙史研究会、和泉書院、一二七―一三九頁。

長谷川哲子（二〇〇〇）「転換の接続詞「さて」について」『日本語教育』一〇五号、日本語教育学会、二一―三〇頁。

浜田麻里（一九九五a）「いわゆる添加の接続語について」『複文の研究（下）』仁田義雄編、くろしお出版、四三九―四六一頁。

浜田麻里（一九九五b）「サテ、デハ、シカシ、トコロデ―転換の接続詞―」『日本語類義表現の文法（下）　複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編、くろしお出版、六〇〇―六〇七頁。

濱千代いづみ（二〇〇七）「『平家物語』における「さて」の用法」

『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第二六号、岐阜聖徳学園大学国語国文学会、八四―六一頁。
藤本真理子（二〇〇八）「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』九〇輯、大阪大学国語国文学会、四〇―五三頁。

（ももせ・みのり　本学大学院博士後期課程）

番号（資料）	頁数	場面	用例
1（竹取）	56頁	地・文頭	さる時よりなむ、「よばひ」とはいひける。（19頁）～それよりなむ、すこしうれしきことをば、「かひあり」とはいひける。（56頁）さて、かぐや姫のかたちの、世に似ず（56頁）されば、女の墓をばなかにて、左右になむ、男の墓ども今もあなる。（370頁）～また、ひとりの男になりて、われとのみ契らずながらおなじえにすむはうれしきみぎはとぞ思ふ（373頁）さてこの男は、くれ竹のよ長きを（373頁）
2（大和）	373頁	地・文頭	
3（源氏・帚木）	77頁	対話・文頭	織女の手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむはべりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。（76頁）中将、「その織女の裁ち縫ふ方をのどめて、～かたき世とは定めかねたるぞや」と言ひはやしたまふ。（77頁）「さて、また同じころ、まかり通ひし所は（77頁）
4（源氏・帚木）	87頁	対話・文頭	宿世の引く方はべるめれば、男しもなむ仔細なきものははべめる」と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこつきて語りなす。（86頁）「さて、いと久しくまからざりしに、もののたよりに立ち寄りてはべれば（87頁）
5（源氏・帚木）	106頁	地・文頭	「かの、ありし中納言の子は～上にも我奉らむ」とのたまへば、（105頁）「いとかしこき仰せ言に～睦びはべらず」と申す。（106頁）さて、五六日ありて（106頁）

番号（資料）	頁数	場面	用例
6（源氏・若紫）	203頁	対話・文頭	「かの国の前の守、新発意のむすめかしづきたる家いといたしかし。（202頁）大臣の後にて、～なかなか法師まさりしたる人になんはべりける」と申せば、（203頁）「さて、そのむすめは」と問ひたまふ。（203頁）
7（源氏・常夏）	248頁	対話・文頭	「さ思はれば、今日にても」と、のたまひ棄てて渡りたまひぬ。（246頁）～いと言ふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あはぬ歌、口疾くうちつづけなどしたまふ。「さて、女御殿に参れとのたまひつるを、しぶしぶなるさまならば、ものしくもこそ思せ。（248頁）
8（源氏・橋姫）	154頁	対話・文頭	君は、姫君の御返り事、いとめやすく児めかしきをかしくみたまふ。（152頁）宮にも、～さればよと御気色を見て、いとど御心動きぬべく言ひつづけたまふ。「さて、そのありけん返り事は、などか見せたまはざりし。まろならましかば」と恨みたまふ。（154頁）
9（堤中納言物語・はなだの女御）	475頁	対話・文頭	「御方こそ。この花はいかが御覧ずる」と言へば、「いざ、人々にたとへきこえむ」とて、（472頁）～罪を離れむとて、かかるさまにて、久しくこそなりにけれ」とのたまへば、北の方、「さて、斎宮をば、何とか定めきこえたまふ」と言へば（475頁）

番号（資料）	10（土佐日記）	11（落窪物語・巻之一）	12（落窪物語・巻之一）
頁数	55頁	49頁	106頁
場面	地・文頭	地・文頭	対話・文頭
用例	聞きしよりもまして、いふかひなくぞ、こぼれ破れたる。家にあづけたりつる人の心も、荒れたるなりけり。（55頁）～いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。さて、池めいて窪まり、水つけるところあり。（55頁）	いつのほどにか短さも見えたまはむ。また、頼もしげなくとも、うしろやすくのたまはむ」と書きてやりつ。（48頁）帯刀、見せたてまつりたれば、「いみじくされて物よく言ふべき者かな。むげに恥づかしと思ひたりつるに、気ののぼりたらむ」と、ほほゑみてのたまふ。さて、あこぎ、ただ一人して、言ひ合すべき人もなければ（49頁）	「あこぎをさへ、何しにさいなむ。使ひつけてはべれば、なきはいとあし。召してむ」とのたまへば、「あやしくも～ともかくも御心。さて、『使ひよし』とはしも、なのたまひそ。（106頁）

番号（資料）	13（落窪物語・巻之二）	14（落窪物語・巻之三）
頁数	120頁	253頁
場面	対話・文頭	消息・文頭
用例	「落窪の君をおのれに賜へれば、この御方の人にはあらずや」と言ふに、（120頁）～。あこぎ、よろづのことよりも、～、静心なくて、「さて、いつか」と言へば（120頁）	「券は何か賜はらむ。またも参らせまほしくなむ。（241頁）「～。今よりはいとうれしく、明け暮れもさぶらひぬべしと思ひたまへしを、命のびてなむ。さて、賜はせたる券は賜はるまじきよしは（253頁）

※頁数は、今回テキストとした、新編日本古典文学全集（小学館発行）による。

※実線は『跳び越しのサテ』、網掛部は跳び越し部分、点線は同一話題の先行部。